

〈研究・調査報告〉

## 日本人大学生における日本語力の課題

羽鳥美有紀 ・ Brett Collins

### 【要旨】

近年、若者の日本語力の低下が指摘され、大学での学びにおいてもその傾向が見られる。また、第二言語習得過程においては、学習を困難とされる要因が母語にあるのか、それとも学習障害に起因するものなのかの判断が難しい。そこで本研究では、大学生の日本語力について学習障害も視野入れ、どのような課題があるのかを明らかにすることを目的とし調査を実施した。これまでの研究で、特に助詞の使い分けについての課題が浮き彫りとなっていたが、本調査からは、助詞よりも接続詞の使用の間違が多いことが明らかとなった。また、学習障害については、顕著なデータ結果は現れず、全体的な調査自体に課題が残った。今後は、学習背景なども含め、縦断的に調査を継続していきたい。

キーワード：日本語力、読解力、語彙力、学習障害、ディスレクシア

### 1. はじめに

近年、若者の日本語力の低下が大きな問題となっており、大学生においても、その傾向が顕著に見られる（田島ほか 2016、橋本ほか 2009、）。日本語力の中でも、語彙力や読解力、特に助詞や構文の用法の誤りに関するものである。その他、ひらがなやカタカナの表記さえ間違っていることもある。そのため、レポートや就職のための書類作成などにおいては、内容以前の問題であり、教員を悩ます一つの要因になっていることに間違いない。

日本語力低下の問題は、日々の学生生活の中でも影響を与えている。基本的な語彙力や読解力が低ければ、教科書や文献資料、授業内容、書類や伝達事項などの内容理解に支障が出ることは明らかである。また澤口・瀬戸（2015）は、読むことは社会を生き抜くために必要だとも言及している。

また、第二言語習得過程において、学習が困難とされる学生は、母語、いわゆる日本語力に問題があるのか、それとも学習障害によるものなのかの判断が難しい。学習障害とは、文部科学省の定義<sup>1</sup>によると、「聞く」「話す」「読む」「書く」「計算する」「推論する」といった学習に必要な基礎的な能力のうち、一つないし複数の特定の能力についてなかなか習得できなかつたり、うまく発揮することができなかつたりすることによって、学習上、様々な困

難に直面している状態である」とされている。現在は、様々な背景を持つ学生が平等に学びの機会を持てる社会となってきたからこそ、学習障害を持つ学習者も、学習障害を持たない学習者と同様の学習目標を到達できるようにサポートし、指導することが求められていると考える。

このように、語彙力や読解力は日本語力の中でも基本となるものであり、ここに問題があるということは、その他への影響も大きいため今後真剣に考えていくべき課題であると言える。また、適切な指導やサポートをするために、それが母語に起因するものなのか、学習障害に起因するものなのかも見極める必要がある。

そこで本研究は、日本人大学生を対象に、日本語の読解力と語彙力を測り、その正答率や誤答傾向を分析し、学習障害も視野に入れて大学生の日本語力の課題を明らかにする。そして、日本人大学生への日本語力向上のために、今後どのような指導やサポートが必要なのか提案することを目的とする。

## 2. 研究の背景

ここでは、日本人の日本語力の現状や問題、第二言語習得と学習障害に関する先行研究について概観する。日本語力と言っても、具体的に何を指すかはかなり広い範囲に及ぶ。実際のところ、「日本語力」以外にも「日本語能力」や「国語力」など、同じような意味を持つ言葉の使用が多く見られる。また、日本語の能力を測定するための試験も多々ある。例えば、日本語検定（特定非営利活動法人 日本語検定委員会）、作文検定、論理文章能力検定（基礎力財団）などである。それぞれ、日本語力を測る基準や対象者も異なる。そのため、本研究における読解力については日本語力の一つの側面でしかないということを前提としたい。

### 2.1 読解力

経済協力開発機構（OECD）は、加盟国の15歳を対象にPISAを3年に一度実施している。PISA（Programme for International Student Assessment）<sup>2</sup>とは、「生きるために必要な知識や技能」、すなわち、持っている知識や技能を実生活の様々な場面で直面する課題にどの程度活用できるかを調査するものであり、読解リテラシー、数学的リテラシー、科学的リテラシーの3分野から構成された学習到達度調査のことである。3つの分野の中でも特に問題となっているのが読解力である。PISAによると、読解力とは、「自らの目標を達成し、自らの知識と可能性を発達させ、社会に参加するために、書かれたテキストを理解し、利用し、熟考し、これに取り組むことである」と定義している。2018年に行われたPISAでは、読解力はOECDの平均を上回っているものの、2015年に実施された調査の時よりも低下している。また、分析結果から、読書を肯定的に捉える生徒や、実際に本を読む頻度が高い学生は読解力が高い傾向にあると報告されている。その中でも、フィクション、ノンフィクション、新聞を読む

生徒の得点が高いことが明らかとなった<sup>3</sup>。澤崎（2012）は、大学生の読書習慣と文章理解力との関係について、読む媒体はインターネット、雑誌、新聞、マンガよりも、小説などの文庫本のほうが文章理解力との相関が高いと述べている。また、澤口・瀬戸（2015）は、高校生を対象に文章読解について調査をし、その結果の中で、文章読解におけるつまずきの原因として読書量の低下、語彙力不足、意欲だと示唆している。現在は、IT 技術や AI などの急速な発展により、活字を読むことが少なくなっている。社会全体で活字に触れる機会が少なくなっていることも、読解力や記述力低下の原因でもある（澤口・瀬戸 2015）。

## 2.2 語彙力

重田・中原（2019）は、就職活動時に活用されている SPI の言語分野から、大学生の国語力について調査をし、その結果、語彙力に課題があると述べている。特に助詞の「に」と「で」の用法の間違が多いことについて指摘している。語彙力が低い原因として、田島ほか（2016）は、活字を読む習慣の不足にあるとし、活字を読まない学生の語彙力は大学の学びに必要なレベルに達していなく、日常会話レベルにとどまっていると述べている。同様に佐藤（2011）も日本人大学生の語彙力の低さを指摘しているが、語彙を知っているだけではなく、その語彙を適切に運用できる能力もなければならぬとし、インプットの少なさが語彙力の低さの原因であると考察している。

## 2.3 学習障害

これまで、学習障害を取り上げた研究はあるが、主に初等教育に焦点を当てた研究（大谷他 2015、加賀田他 2015、加藤 1993、田中 2005 など）が多く、大学という高等教育、特に大学一年次の第二言語学習に焦点をあてたものは数少ない。高校から大学への移行期、すなわち大学一年次の日本語母語話者を対象とした本研究は管見では見当たらないため、調査を行い、研究を進めることにより、第二言語学習において具体的な支援や学習方法を提案できると考える。

言語コーディング相違仮説（The Linguistic Coding Differences Hypothesis：以下 LCDH）によれば、第二言語を学習する能力は、第一言語の学習能力と密接に関係しているため、第二言語の言語学習の困難は母語に起因しているという。また、Humes-Bartlo（1989）や Skehan（1986）は母語と外国語の誤りには類似性があることを指摘している。

これまで概観してきたように、日本人の日本語力、特に読解力や語彙力に問題があることについての指摘も多く、具体的な対応策を考えるうえで、学習障害（本研究では、学習障害の中でも文字の読み書きの困難さの疾患であるディスレクシアに焦点を当てる）も視野に入れ、全体の誤用の傾向を見出す必要がある。そこで本研究では、大学一年次を対象に日本語力を測り、今後の課題を明らかにしたうえで対応策を検討することとした。

### 3. 調査概要

#### 3.1 調査方法

日本語を母語とする大学生 80 名を対象に、日本語読解力を測定するために調査テストを実施した。なお、調査協力者は、小学校、中学校、高等学校とすべて日本で教育を受けた学生で、学年も 1 年生のみとした。テストの実施時期は、2020 年 9 月である。

#### 3.2 調査テスト

調査テストは、Google Form を使用し、3 つの異なる日本語レベルの試験を実施した。一つのテストに対して、読解・語彙力を測るもの 10 問と、学習障害の傾向を測るもの 5 問、計 15 問の設問がある。調査テスト実施前に、3 つのレベルの妥当性を確認するため、調査協力者 15 名に対して同様のテストを行なった。

本文は、日本語能力試験 N1 の読解問題と大学入試問題集の読解の中から選択した。それぞれ異なるレベルのテスト作成のために、本研究では科研費（課題番号 25370573）の成果物である「日本語文章難易度判別システム」<sup>4</sup> (<http://jreadability.net>) と、「ことば不思議箱」<sup>5</sup> を活用した。「日本語文章難易度判別システム」は、日本語母語話者ではなく、日本語学習者にとっての難易度を 6 段階で判定したものである。また、「ことば不思議箱」は、日本語テキストの難易度を測るものだが、B9 スケールと B13 スケールで判定される。

以下、3 つの日本語文章難易度判定についてのレベルを表にしたものである。

表 1 「日本語文章難易度判別システム」の 6 段階判定

レベル	レベル感
初級前半	単文を中心とする基礎的日本語表現に関して理解できる。複文や連体修飾構造などの複雑な文構造は理解できない。
初級後半	基本的な語彙や文法項目について理解できる。テ形による基本的な複文なども理解できる。
中級前半	比較的平易な文章に対する理解力があり、ある程度まとまった文章でも内容が把握できる。
中級後半	やや専門的な文章でも大まかな内容理解ができ、日常生活レベルの文章理解においてはほぼ不自由がなく遂行できる。
上級前半	専門的な文章に関してもほぼ理解できる。文芸作品などに見られる複雑な構造についても理解できる。
上級後半	高度に専門的な文章に関しても不自由なく、理解できる。日本語のあらゆるテキストに対して困難を感じない。

Web 「jReadability」 ([https://jreadability.net/sys/q\\_and\\_a?lang=ja](https://jreadability.net/sys/q_and_a?lang=ja)) を元に筆者が作成

表2 B9 <均衡コーパスに基づく9段階相対評価>スケール

スケール	難易度
1	とてもやさしい
2	やさしい
3	かなりやさしめ
4	やややさしめ
5	ふつう
6	ややむずかしめ
7	かなりむずかしめ
8	むずかしい
9	とてもむずかしい

Web「ことば不思議箱」(<http://kotoba.nuec.nagoya-u.ac.jp/sc/obi3/>) を元に筆者が作成

表3 B13 <13段階の学年区分>スケール

スケール	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
学年区分	小学						中学			高校			大学一般
	1年	2年	3年	4年	5年	6年	1年	2年	3年	1年	2年	3年	

Web「ことば不思議箱」(<http://kotoba.nuec.nagoya-u.ac.jp/sc/obi3/>) を元に筆者が作成

これら3つの文章難易度判定を使用し、作成した10セットのテストをすべて測定し、レベルが異なる3つのテストを選んだ。実際に実施した調査テストの難易度は以下の通りである。

表4 実施テストの難易度

	日本語文章難易度判別システム	B9 スケール	B13 スケール
問題1	中級前半	4	9
問題2	中級後半	5	13
問題3	上級前半	6	13

テストは記述式ではなく、すべて選択の空欄補充形式とした。内容理解を問う問題が中心だが、助詞や接続詞を問う問題も含まれている。

また、学習障害（主にディクレクシア）を識別するテストとして、促音、撥音、二重母音などの特殊音節や、「め」と「ぬ」や「雪」と「雷」のように形態的に似ている文字の誤りなど、書字障害に見られる症状を判別する設問を作成した。同時に、文字を読むことに時間がかかるという症状もあるため、すべての調査テストでそれぞれ回答が終わるまでの時間も測るように指示した。なおその旨は調査テストの注意事項、及び各設問文冒頭にも記載した。

#### 4. 調査結果と考察

本調査の結果、全体的な正答率の平均は、問題 1 が 90.14%、問題 2 が 89.07%、問題 3 が 81.33%であった。そのうち、読解力を測る設問の正答率平均は、問題 1 が 85.87%、問題 2 が 83.88%、問題 3 が 72.26%であった。最低平均得点率は問題 3 の設問 6 が 6.7%で、最高平均得点率は問題 1 の設問 7 で 100%だった。学習障害を識別する設問の正答率平均は、問題 1 が 98.68%、問題 2 が 99.46%、問題 3 が 99.46%であった。

以下、問題ごとに結果の詳細を考察とともに報告する。また、最後にディスレクシアの観点からも考察を述べる。

##### 4.1 問題 1 の結果

問題 1 は 3 つのレベルの中で最も難易度が低い問題である。各設問の正答率は、以下の通りである。

表 5 問題 1 における設問ごとの正答率

設 問	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
正答率	94.7	94.7	62.7	89.3	94.7	84.0	100	69.3	93.3	76	100	98.7	96	98.7	100

単位：%

問題 1 の設問 1～10 は読解や語彙を問うものである。正答率が最も低いものが設問 3 で 62.7%であった。設問 3 は、適切な接続詞を選ぶもので、選択肢は「ところで」、「ところが」、「しかし」、「しかしながら」である。正答は「ところで」であり、次いで多かったのが「しかし」で 22.7%である。「ところで」は、転換の接続詞で、前で述べられた内容と関係のない内容について述べたい場合に使用される。「しかし」は、逆説の接続詞で、前で述べた内容と対照的だと感じる内容を強調したい場合に使われる。「しかしながら」も同じ逆説の接続詞であり、「しかし」に次いで 10.7%の回答率であった。接続詞は文脈を展開していくうえで重要な働きをしている。誤った接続詞の選択は、本文そのものの内容理解が十分でない可能性があるとも言える。

その他、助詞を問う設問 1 の正答率は 94.7%であった。助詞については、重田・中原 (2019) が指摘していたのは反対に、他の設問と比較しても正答率は高かった。

#### 4.2 問題 2 の結果

問題 2 の難易度は、問題 1 よりも高く、問題 3 よりも低くなっている。各設問の正答率は以下の通りである。

表 6 問題 2 における設問ごとの正答率

設 問	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
正答率	88.0	68.0	48.0	96.0	86.7	98.7	74.7	94.7	94.7	89.3	97.3	100	100	100	100

単位：%

問題 1 の設問 1～10 は読解や語彙を問うものである。正答率が最も低いものが設問 3 で 48.0%であった。設問 3 は、以下に示す本文の「③」に当てはまる語彙を、「ところで」、「ところが」、「その」、「たしかに」の中から選ぶものである。

本文一部抜粋：

③問題は、この三要素のうち、今や「精神」と「身体」も隅に追いやられていることにある。

正答は「ところが」であるが、「その」を選択した割合も 40.0%と正答率に近い割合であった。「ところが」は逆接の接続詞で、その後は予想外の展開が続くときに用いられる。本文も、話が展開することから、新たな段落の始まりとなっている。そのため、内容理解が十分でなくても、形式から接続詞を選ぶこともできる。設問 3 の選択肢の中で接続詞は、「ところで」と「ところが」の 2 つである。「その」の回答が多かった理由として考えられるのは、読点の位置である。すべての文を読み、設問ごとに回答している段階で、再度本文を見た際「③問題は、(以下省略)」となっているため、その箇所だけを見て「その」を選択したことも考えられる。もし、読点の位置が「③、問題は (以下省略)」というように「問題」の前になっていたならば、「その」を選択する可能性は低かったのではないかと考える。

次に正答率が低かった設問 2 は、動詞の活用と語彙を測るもので、選択肢「確率され」、「確立し」、「確立され」、「確立されたが」があった。正答は「確立され」であり、次いで多かったのが「確率され」と「確立し」で、選択した割合は 10%と同じであった。「確立」と「確率」の漢字の違いと、自動詞の受け身の理解に誤りが見られた。その他、助詞を問う設問 1 と設問 6 の正答率はそれぞれ、88.0%と 98.7%であった。設問 1 は、正答の助詞「が」に次いで、助詞「は」を選択した割合は 10%であった。問題 2 も、問題 1 と同様、助詞の正答率

は他と比べて決して低くないことが分かった。

#### 4.3 問題3の結果

問題3は3つのレベルの中で最も難易度が高い問題である。問題1と問題2と比較し、その正答率は大幅に下がる結果となった。各設問の正答率は以下の通りである。

表7 問題3における設問ごとの正答率

設問	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
正答率	77.3	85.3	72.0	77.3	65.3	6.7	66.7	96.0	92.0	84.0	100	100	100	97.3	100

単位：%

問題3の設問1～10は読解や語彙を問うものである。正答率が最も低いものが設問6で6.7%であった。設問6は、以下に示す本文の「⑥」に当てはまる語彙を、「して」、「しながら」、「せず」、「と」の中から選ぶものである。

以下、設問6に該当する本文の抜粋である。

本文一部抜粋：

けれどもそうした欲望の多様化は、奇妙なことに画一化と矛盾⑥進行している。

正答は「せず」であるが、「しながら」を選択した割合は36.0%、「して」を選択した割合は24.0%であった。誤答の「しながら」と「して」は、「する」という意味であり、正答の「せず」、いわゆる「しない」という意味と全く異なる。

同様に、設問3も選択した語彙によって本文の意味が大きく異なるものである。設問3の選択肢は、「与えなくなるが」、「与えてはいなかったが」、「与えてきたが」、「与えなくなったが」で、正答は「与えなくなったが」となる。しかし、「与えてきたが」を選択した割合は14.7%で、正答に次いで多かった。この「与えなくなった」と「与えてきた」の2つも全く意味が異なる表現である。このように、問題3では、問題1と問題2に比べて、大きく正答と異なる回答をした割合が多く、全体的な内容理解が十分でないことが明らかとなった。

そして、助詞に関する設問についてであるが、助詞に関する設問10の正答率は84.0%で、問題3の設問の中では高いほうであった。問題1と問題2の助詞を問う問題とも比べて大幅に低いわけでもない。この結果、文章の難易度が異なっても、助詞の正答率は大きく変わらないことが分かった。重田・中原(2019)は、特に助詞の「に」と「で」の用法も間違いについて言及していたが、設問10で「で」を選択した割合は84.0%、「に」を選択した割合は5.3%と、2つの用法を理解できているという結果も明らかとなった。ただ、これについては



1つの設問からの結果であるため、一般化することはできない。

次に、ディスレクシアの視点から考察を述べる。

#### 4.4 ディスレクシアの視点から

すべての問題において、設問 11～15 はディスレクシアを識別するものである。本節では、その部分に関して結果と考察を述べる。

問題 1 の正答率の平均は 98.68% で、ほぼ 100% に近い結果となった。その中でも正答率が低かった設問 13 は、本文中に出てくる「嘆かない」の読みを問うものであり、選択肢は、「なかない」、「なげがない」、「なげかない」、「ひびかない」である。誤答の「なかない」を選んだ割合は、4% である。問題 2 の正答率の平均は 99.46% で、ほぼ 100% に近い結果となった。その中でも正答率が低かった設問 11 は、本文中に出てくる「抱える」の読みを問うものであり、選択肢は、「かえる」、「かかえる」、「かかる」、「だきえる」である。誤答の「かえる」と「かかる」を選んだ割合は、1.3% である。問題 3 の正答率の平均は 99.46% で、問題 1 と問題 2 と同様の高い割合となった。

今回の調査からは、ディスレクシアの傾向がある調査協力者がいるとは断定することができない結果となった。ディスレクシアの特徴でもある読解にかかる時間に関して、回答に大幅に時間を費やしたという結果は出なかった。また、誤答もそれぞれ別の調査協力者であり、読み間違いや見間違いなどの原因と区別をすることが難しい。

## 5. おわりに

本研究では、日本人の日本語読解力と語彙力を分析し、学習障害も視野に入れて、大学生の日本語力の課題を明らかにすることを目的として調査を実施した。

第 1 章では、日本人の日本語力、特に語彙や読解力の重要性、そして学習障害という点も含め、研究の意義と目的を述べた。第 2 章では、研究の背景として日本人の語彙力と読解力の現状や問題、第二言語習得過程における母語の影響に関して概観した。第 3 章では、調査方法について説明をし、第 4 章でその結果について考察とともに述べた。

本調査を通して、日本人の読解力の測定を試みたが、一般化するだけの目立ったデータ数はなかった。重田・中原 (2019) は、大学生の国語力の課題は、語彙力、文法 (助詞)、抽象的な文章や自分に馴染みのない文章の読解にあると述べていた。しかし本調査からは、助詞ではなく、接続詞に関する理解が低いことが明らかとなった。助詞よりも、文と文をつなぐ重要な役割を果たす接続詞の使用の理解が低いということは、前後の文の理解だけでなく、本文全体の理解、つまり読解力が低いとも言える。

今後、調査対象者の学習背景や、日々の読書量などについても把握することで、読解力に与える要因なども明らかにできると考える。また、語彙力や読解力、ディスレクシアを見分

けるためのテストについても再度検討が必要である。今回は、空欄補充の形式を採用したが、熟語の意味や語句の用法など、多面的に測ることも必要であった。また、今回の調査では、大学一年生を対象にしたが、1年次だけでなく、半年から1年ごとに縦断的に調査をし、大学生の日本語力、特に語彙力や読解力がどのように向上し、そこにはどのような要因が関係しているのかについても明らかにしていきたい。また、学習障害については、認知していないことも多いため、学習が困難になっている具体的な原因をはっきりさせるためにも、日々の教育指導の中で教師が学生をきちんと観察し気づくこと、そして適切なサポートをすることが重要である。また、これまでは日本語を母語としない学生に対しての日本語教育が主であったが、田島ほか（2016）と同様に、日本語力が十分ではない日本語母語話者に対しても教育や支援が必要であると考える。

### 【注】

1. 文部科学省（2013）「(8) 学習障害」[https://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/tokubetu/mext\\_00808.html](https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/tokubetu/mext_00808.html)（2021年9月13日アクセス）
2. 文部科学省（2015）「OECD 生徒の学習到達度調査（PISA）《2000年調査国際結果の要約》」[https://www.mext.go.jp/b\\_menu/toukei/001/index28.htm](https://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/001/index28.htm)（2021年9月13日アクセス）
3. 文部科学省（2018）「OECD 生徒の学習到達度調査 2018年調査(PISA2018)のポイント」[https://www.nier.go.jp/kokusai/pisa/pdf/2018/01\\_point.pdf](https://www.nier.go.jp/kokusai/pisa/pdf/2018/01_point.pdf)（2021年9月13日アクセス）
4. 「日本語文章難易度判別システム」(<http://jreadability.net>) は、日本語の学習者と教師のための Web システムで、日本語文章の難易度を測るものである。また、このシステムは科研費（課題番号 25370573）の成果物である。
5. 「ことば不思議箱」は、日本語テキストの難易度を均衡コーパスに基づく9段階相対評価と、13段階の学年区分のスケールによって測定できるものである。（<http://kotoba.nuce.nagoya-u.ac.jp/sc/obi3/>）

### 【参考文献】

- 大谷みどり・飯島睦美・築道和明・小川 巖（2015）「英語教育と特別支援教育の在り方への一考」『島根大学教育学部紀要』48: 49-53.
- 加賀田哲也・村上加代子・伊藤美幸・川崎育臣・森田琢也・チェン敦子（2015）「英語授業における特別支援に関する調査」『JES Journal』15: 142-155.
- 加藤義男（1993）「学習障害（LD）児の現状と課題に関する一考察」『岩手大学教育学部研究年報』53(1): 123-135.
- 北尾謙治・宮本英男（1983）「大学生の英語読解力の問題点—誤答の傾向と推移—」『同志社大学英語英文学研究』32: 118-147.

- 佐藤尚子 (2011) 「大学での学びに必要な語彙力の養成」『リメディアル教育研究』6(1): 6-9.
- 澤口真理・瀬戸美奈子 (2015) 「高校生の文章読解における課題について—日本語能力の視点から—」『三重大学教育学部研究紀要』66:165-170.
- 澤崎宏一 (2012) 「大学生の読書経験と文章理解力の関係」『国際関係・比較文化研究』10(2): 23-41.
- 重田美咲・中原郷子 (2019) 「SPI (言語) から考える大学生の国語力」『下関市立大学論集』63(1): 61-68.
- 高橋義人 (2008) 「日本語の将来とわが国の運命」『学術の動向』13(1): 65-67.
- 田島ますみ (2014) 「大学生の日本語語彙力に対する自己評価」『中央学院大学人間・自然論叢』38: 75-94.
- 田島ますみ・佐藤尚子・橋本美香・松下達彦・笹尾洋介 (2016) 「日本人大学生の日本語語彙量測定の試み」『中央学院大学人間・自然論叢』41: 3-20.
- 田中裕美子 (2005) 「言語学習障害・読み書き障害」『音声言語医学』46: 148-154.
- 橋本美香・山口恒夫・兵藤文則 (2009) 「川崎医療短期大学における「日本語プレースメントテスト」の実施結果 (第2報)」『川崎医療短期大学紀要』29: 1-5.
- 松浦年男 (2015) 「大学初年次の学生に対する日本語語彙力調査の試行」『北星論集 (文)』52(3): 53-61.
- Humes-Bartlo, M (1989) *Bilingualism Across the LifeSpan*. Cambridge University Press.
- Skehan, P. (1986) Where does language aptitude come from? P. M. Meara (ed.) *Spoken Language*, 95–113. London, England: Centre for Information and Language Teaching.

# A Report of Japanese Proficiency in Japanese University Students

Miyuki Hatori, Brett Collins

## Abstract

There is a common idea in Japan that young people's Japanese proficiency has declined, a tendency that might be observed in university students. Moreover, judging whether the idea of declining Japanese proficiency is the result of learning disabilities and that current proficiency levels influence second language acquisition has become important. This study aimed to clarify types of problems present in the current cohort of Japanese first-year university students as they negotiated English as a second language. Previous studies have highlighted issues related to the proper use of particles in Japanese text, but this study revealed that there were more mistakes in the use of conjunctions than particles. In addition, no significant results appeared regarding learning disabilities, and problems remained in the overall survey itself. In the future, we would like to continue the survey longitudinally to include a more comprehensive investigation into the background of the participant's learning histories.

Key words: Japanese proficiency, Reading comprehension, Vocabulary acquisition,  
Learning disabilities, Dyslexia